岩手大学教育学部研究年報　第五十四巻第一号（一九九四年十月）

詩経解釈史序説

関雎篇の経学的解釈とその評価をめぐって

藪　敏裕

（一九九四年六月三十日受理）

一、はじめに

『詩経』[1] 周南関雎篇は、

○関関雎鳩、在河之洲、窈窕淑女、君子好逑、
○参差荇菜、左右流之、窈窕淑女、寤寐求之、
○求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾転反側、
○参差荇菜、左右采之、窈窕淑女、琴瑟友之、
○参差荇菜、左右芼之、窈窕淑女、鐘鼓楽之、

と各章四句、計五章からなる詩である。赤塚忠博士は、冒頭の興詞「関関雎鳩、在河之洲、」について「中国古代詩歌の発生とその展開」[2] で、

字面だけでみると、雎鳩が河の中洲に鳴いているというに過ぎないものが、実はそれだけではなく、まことに幸運なことに、妻を求める良き男が遠くから来たということを意味するのである。それはこの歌謡の現れた当時の人々にはよく分かっていたのである。雎鳩という鳥がそういう永い伝習の観念を負っていたからである。

と述べ、この興詞が、初夏に雎鳩が発情期にはいりクワックワッと鳴いて中洲に入るという情景を単に直叙しているのではなく、古代人が鳥（関雎篇では雎鳩）の神秘性に対して抱いていた観念具体的には鳥（雎鳩）が結婚・安産をもたらすという観念を背景に持ちつつ、良い男が妻を求めに来たことを隠喩すると推定する。また、同様に第二章の興詞「参差荇菜、左右流之、」に関しても、[3]

太古以来野菜を採集するのは女性の作業であり、特に祭礼においては、それを調理して神に供饌（きょうせん）するのはその聖務であった。野菜には水草が珍重された。水草は、大地の精である水分を十分に受けているものであり、実際に栄養価が高く、また、水に洗われて清浄でもあり、これを採るには苦労するの

で、その苦労が誠意のこもった奉仕とも感じられたであろう。そこで、荇菜が新葉を高く低く水面に出して水流に洗い清められるように右に左に揺れていれば、ひとりでにこれを採って神に献げて祈ろうと衷情をかき立てるであろう。……ただし、関雎篇では、荇菜を供する相手は神ではなくて、第一章に示された「君子」になっている。淑女の、思い慕う君子に荇菜を料理して馳走し歓待したいという感情になっている。神に擬らえ得る思い慕う男性があれば、神に尽くすほどの最上の歓待をしたいというのは、女性の心情の自然な移ろいであろう。

と、この興詞が宗廟に供えるための荇菜を採っている様を単に直叙しているのではなく、古代の習俗を背景に女性の男性に対する思慕を隠喩すると規定する。第四章の「参差荇菜、左右芼之、」や第五章の「参差荇菜、左右采之、」も同様、第一章をうけ「君子の来訪を待って歓待する情を表して」いると説明する。そして、関雎篇の詩意を、(4)

○めでたいことに、ミサゴが河の中洲に来て、関々と鳴き、妻を求める君子の来ることを知らせている。このたおやかな淑女こそ、その好き配偶である。
○此方には荇菜が高く低く生えて流れに右に左に揺れている。このたおやかな淑女は、それを採って睦みの宴を張ろうと、寐ても寤めても良き夫を求めていた。
○求めても得られぬまま、寐ても寤めても思いにかきくれ伏して、もどかしやもどかしやと、身もだえして寝がえりばかり。
○今良き夫の来るという吉きお告げを聞いては、いざ高く低く生え出ている荇菜を採ろうよ。それを菜に宴を張り、琴・瑟を奏するうちに進めまいらせようよ。
○高く低く生え出ている荇菜を採り、いざ料理して、それを宴の菜にし、鐘や太鼓を奏して、良き夫をたのしませようよ。

とし、関雎篇の主題は「成婚の吉兆を得た淑女の情」を述べることであり、「淑女の純情」を歌ったとする。さらに、関雎篇の制作年代について、(5)

関雎篇は、まだある特定の女性の問題について詠ずるという叙述には至っていない。成婚を待つ淑女一般について描いている。しかし、古朴な反復体から脱出しつつあるものである。そこで、伝統的な歓待の情を述べるよりも、その悶々の情を述べるという生身の人間の新鮮さがある。平凡な同形の五章構成ではなくて、その展開に適わしい不平均な章句の構成になっており、それは優に序・破・急の緩急がある。……下句に虚字を持つ表現が多いので、むしろ、四字・三字の流動感を醸す。また、関関・窈窕・参差などの音声効果の多い連綿詞を使用している。ことに、第一章は第三句だけ韻を外した三句韻で鮮明に、これを承ける第二章は隔句韻で荘重に、第三章は毎句韻であるだけでなく、「悠哉」の語を反復して急激に、そして、第四章・第五章は隔句韻で荘重に収束している。……関雎篇では第一段では鮮明に、第二段では急激に、そして第三段では荘重に収束するが、第二段の激しさの余韻が耳に残っていて、収束の意がいっそう深厚な音楽となるのである。このように、発展し洗練された歌謡が文王の時代の作品であるはずがない。

と述べ、その形式の成熟度・音楽的効果の洗練度から関雎篇の成立を西周の中期以後のこととし、またその作者についても、[6]

　要するに、関雎篇は、それが誰であるかを指名することはできないが、宮廷的楽人の作であって……

と、宮廷の楽人を想定する。

一方、この関雎篇の冒頭の興詞「関関雎鳩、在河之洲、」について境武男は『詩経全釈』において、[7]

　この鳥が河の中洲に飛来するのは補魚のためであり、その求魚ということに、毛詩の表現では「求女」の義がもたされ、この詩のように求婚を発想するものと解される。

と、赤塚博士が君子来訪に対する歓待を隠喩するとした冒頭2句を「求女」を隠喩するとし、[8]また第二章の興詞「参差荇菜、左右流之、」に関して、

　アサザは祭祀のお供え物と見られ、その採集は若い女性とすれば、次句の淑女と照応する。そして、そのままに異性思慕を暗示する。

と述べ、関雎篇の詩意は詩経の編纂者には「結婚の祝頌楽歌」と理解されていたとする。雎鳩が中洲にいくという行為が発情に由来する隠喩なのか、あるいはまた捕魚に由来する隠喩なのかという違いは、赤塚忠・境武男両氏がそれぞれ冒頭の興詞「関関雎鳩、在河之洲、」の背後に、現代とは異なる中国古代独自の習俗がひかえていることを想定していることによる。両氏はそれぞれ『詩経』中の興詞の類似表現がになう共通の意味の考察を通して、『詩経』の原義を明らかにしようとしている。[9]この『詩経』中の類型的表現の比較・検討による『詩経』原義の研究は近年多大の進歩をとげたが、古代の生活環境やその習俗に関して未解明の部分がまだ残存しており、今後の研究に待たなければならない部分も少なくない。しかし、この類型的表現の比較・検討による原義の研究は一定の成果をあげており、『詩経』の原義は若干の揺れを残しつつも確定しつつある。関雎篇についても冒頭の興詞『関関雎鳩、在河之洲、』の雎鳩が中洲に入るのが発情のためかあるいは補魚のためか確定してはいないが、この句が単に雎鳩がクワックワッと鳴いて中洲に入るという情景を直叙しているのではなく、古代人が雎鳩の神秘性に対して抱いていた観念を背景に持ちつつ、良い男が妻を求めに来たことを隠喩しているとする点は確定している。

ところで、このように古代歌謡としての『詩経』がその真の姿で、どのように生まれたのかという『詩経』成立に関わる研究が進展してくると、またこの『詩経』原義とでもいうべきものと泰・漢期の『詩経』理解との著しい乖離が明らかになってきた。中国の古典は、一般的には先人の訓詁を後人が増補するという形式で伝えられる。そして、この増補が誤解をうみ『詩経』の原義から離れることがあり、また各時代の社会的・政治的な要請から意識的に別の意味を『詩経』に読みこむこともある。本稿では叙上のようにしだいに明らかになりつつある原『詩経』が、秦・漢期にどのように変化していくのかを特に関雎篇に限定して明らかにし、経書としての『詩経』の成立をどう考えればよいかを解明して、経学成立の一端を明らかにしたい。

二、『毛傳』の関雎篇理解

まず、『詩経』[10]全体に対してもっともまとまった訓詁を施しているものに、『毛傳』がある。『毛傳』は以後の『詩経』解釈を長く規定した。『鄭箋』『正義』『集傳』等それぞれの違いはあるものの、概ねこの影響をまぬかれることはなかった。『漢書』芸文志によれば、漢代には『毛詩』系統の本には「毛詩二十九巻」と「毛詩詁訓傳三十巻」とがあった。この両者がどのような関係にあったか定かではないが、この「毛詩詁訓傳三十巻」が現行の『毛傳』であろう。『毛傳』の作者に関しては、漢初の人大毛公毛亨であるとする説等諸説あるが、現状では明確に決定しがたい。[11]この『毛傳』は関雎篇に対して次のように注する。

関関雎鳩、在河之洲、
興也、関関和声也、雎鳩王雎也、鳥摯而有別、水中可居者曰洲、后妃説樂君子之徳、無不和諧、又不淫其色、慎固幽深、若雎鳩之有別焉、然後可以風化天下、夫婦有別則父子親、父子親則君臣敬、君臣敬則朝廷正、朝廷正則王化成、
窈窕淑女、君子好逑、
窈窕幽閒也、淑善、逑匹也、言后妃有関雎之徳、是幽閒貞専之善女、宜為君子之好匹、
参差荇菜、左右流之、
荇接余也、流求也、后妃有関雎之徳、乃能共荇菜、備庶物、以事宗廟也、
窈窕淑女、寤寐求之、
寤覚、寐寝也、
求之不得、寤寐思服、
服思之也、
悠哉悠哉、輾轉反側、
悠思也、
参差荇菜、左右采之、
窈窕淑女、琴瑟友之、
宜以琴瑟友樂之、
参差荇菜、左右芼之、
芼擇也、
窈窕淑女、鐘鼓樂之、
徳盛者、宜有鐘鼓之樂、

これによれば、『毛傳』はまず「関関雎鳩、在河之洲、」を「興」であると定義し、さらに雌雄の関係にけじめがある雎鳩が関関（クワックワッ）と河の洲で鳴き交わしている様を描写することによって、后妃となる女性が貞淑であるべきことを隠喩[12]していると述べている。これについて、赤塚忠博士は、

『毛伝』にしても、『朱伝』にしても、雎鳩に有別の隠喩があるとすれば、何故にそれが雎鳩でなければならぬかを明らかにする必要がある。有別を説くには他に適当な物もあろう。鳥でももっと適切な鳥がありはしないか。雎鳩を挙げるのは寓目（ぐうもく）の情景であったろうか。

と、『毛傳』の関雎篇解釈の無理さを指摘している。また、「窈窕淑女、君子好逑」に対しても、本来『詩経』では婦女のものごしを表す擬態語であった「窈窕」を倫理的に「貞淑」の意に解釈し、詩全体を淑女が関雎の徳を身につければ、彼女は幽閒貞専なすばらしい女性であり、必ず君子の好き連れ合いとしてりっぱな后妃

になるであろうと注し、原義的解釈とは異なり政治的・倫理的に解釈している。また『集傳』が興とする「参差荇菜、左右流之、」に対しては「興」とはせず、雎鳩の徳のある后妃が荇菜を取って供え、またその他の物を備えて宗廟を祭ることを単に直叙していると解説している。以下、『毛傳』をもとに関雎篇を解釈すれば、

○夫婦の別を守ってクワックワッとなごやかに鳴く雎鳩が、河の中洲にいる。そのように奥ゆかしい淑女は、必ず君子のよき連れ合いとなる。

○高く低く生えている荇菜は、左右にこれを求めて宗廟に供える。奥ゆかしい淑女は、寝ても覚めてもこれを求める。

○これを求めても得られないので、寝ても覚めても思いにくれる。思い悩んで輾転と寝返りをうつ。

○高く低く生えている荇菜は、左右にこれを求めて宗廟に供える。奥ゆかしい淑女は、琴瑟を友として楽しむ。

○高く低く生えている荇菜は、左右にこれを求めて宗廟に供える。奥ゆかしい淑女は、鐘鼓を楽しむ。

となる。この『毛傳』による解釈では、たとえば第二章の「寝ても覚めてもこれを求める。」等の句が一体何を求めるのか必ずしも明確ではない。これがかりに宗廟に供える荇菜であるとしても、荇菜を寝ても覚めても求めるというのはかなり無理な解釈である。また、第一章が関雎篇中でいかなる位置づけになるか、明確ではない。さらに前述したように、雎鳩が雌雄の関係がまじめでけじめがある鳥であるかどうかも問題であり、『毛傳』による解釈は漢代的な政治的倫理的潤色による解釈であると考えられるが、この解釈が漢代のいかなる人々による、いかなる目的を持った解釈であるかは別稿で考察する。ここでは、『毛傳』の解釈の特徴を指摘するにとどめる。それでは『毛傳』以外の秦・漢期の他文献は関雎篇をどのように理解していたのであろう。

三、秦・漢期の他文献の関雎篇理解

前漢初期の高祖期ないし呂后期（紀元前二〇六～一八〇）に成立したと考えられる『馬王堆漢墓帛書五行篇』[13]（以下五行篇）第二十五章の説が関雎篇を引用している。

茭芍〔淑女、唔〕昧求之、思色也、求之弗得、唔昧思伏、言亓急也、繇才繇才、嬉槫反廁、言亓甚〔急也、急〕如此亓甚也、交諸父母之廁、爲諸、則有死弗爲之矣、交諸兄弟之廁、亦弗爲也、交〔諸〕邦人之廁、亦弗爲也、〔畏〕父兄、亓殺畏人、禮也、繇色榆於禮、進耳、

ここで五行篇は「茭芍〔淑女、唔〕昧求之、」（現行本第二章の「窈窕淑女、寤寐求之、」）に「思色也」と注し、この句は男性を慕う女性の切なる気持ちを表したものとする。また、「求之弗得、唔昧思伏、」（現行本第三章の「求之不得、寤寐思服、」）および「繇才繇才、嬉槫反廁、」（現行本第三章の「悠哉悠哉、輾転反側、」）にそれぞれ「言亓急也」「言亓甚〔急也〕」と注し、それぞれを男性を慕う女性の気持ちの激しさを言うものとしている。五行篇第二十五章の説は、此の後男女の交渉を父母のかたわらで行うかどうかということから議論をすすめ、父母のみならず兄弟や邦人の前でさえも男女の交渉は行われない事を述べ、禮（この場合男女の交渉をどこで行うかということ）が血縁的な性格（父母）を越えて非血縁的な普遍的全天下的な性格（邦人）を持つことを述べている。第二十五章の説全体の意味から考えても引用された関雎篇

が男女の性交渉に関わるものであり、第二・三章も『毛傳』とは異なり女性が男性を交渉の相手として思い慕う意味で理解されていることは明白であろう。五行篇第二十五章の説の関雎篇解釈は断章取義で一部分の解釈であり原義的解釈が「淑女の純情」としたのとは若干ずれるものの、女性が男性を思い慕うとしている点で先述した赤塚忠・境武男両氏の原義的解釈にかなり近く、『毛傳』が淑女が荇菜を寝ても覚めても求めるとするのとは異なる。

次に、陳喬樅によれば今文系統の魯詩とされる『史記』十二諸侯年表に、[14]

太史公讀春秋曆譜諜、至周厲王、末嘗不廢書而歎也、……周道缺、詩人本之衽席、関雎作、仁義陵遲、鹿鳴刺焉、及至厲王、以悪聞其過、公卿懼誅而禍作、厲王遂奔干彘、亂自京師始、而共和行政焉、

とある。これによれば関雎篇は周の勢力が衰えた厲王の時代に作られたとされており、『毛傳』とは異なり制作年代を特定している。また「周道缺、詩人本之衽席、関雎作、」という表現から考えると、関雎篇は詩人が衽席（しとねでの夫婦の性交渉）のけじめのなさを非難して作ったことになり、十二諸侯年表では関雎篇中の「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾転反側、」などが濃厚に相手を求める句として好色な女性の性的欲求の貪欲さとして理解されているのであろう。したがって女性が男性を性交渉の相手として求めると言う行為を原義的解釈が女性の純情とするのとは異なりここでは女性の性的欲求の行き過ぎとみて非難している。しかし、全体の詩意の問題をおいて、「求」める当事者が誰か「求」める対象が何かというレベルでは十二諸侯年表は原義的解釈や五行篇などと同様に女性が男性を思慕するとしており、この点『毛傳』が「求」める対象を宗廟に供える荇菜とするのと異なっている。

また、『史記』儒林傳に、

太史公曰、余讀功令、至於廣厲學官之路、未嘗不廢書而歎也、日嗟乎、夫周室衰而関雎作、幽厲微而禮樂壊、諸侯恣行、政由疆國、故孔子閔王路廢而邪道興、於是論次詩書、修起禮樂、適齊聞韶、三月不知肉味、自衛返魯、然後樂正、雅頌各得其所、

とある。ここでも関雎篇は十二諸侯年表と同様に、周の勢力が衰えた厲王の時代の作とされている。また関雎篇の内容については、周の勢力が衰えて関雎篇が作られたと言っていることから推すと、関雎篇が周室の衰退を非難しているととらえていると思われる。従って、十二諸侯年表と同様に詩人が衽席（しとねでの夫婦生活）のけじめのなさを非難して作ったと考えられる。司馬遷の関雎篇に対するこの理解はおそらく両者から考えて一定したものであったと思われる。従って、儒林傳の関雎篇理解は十二諸侯年表と同様に、女性が男性を性交渉の相手として求めると言う行為を女性の純情とするかまたは女性の性欲の行き過ぎとみるかと言う詩意の問題をおいて、「求」める当事者が誰か「求」める対象が何かというレベルでは原義的解釈や五行篇・十二諸侯年表などと同じであり、『毛傳』が「求」める対象を宗廟に供える荇菜とするのとは異なる。[15]

また、陳喬樅によれば今文系統とされる『漢書』杜欽傳に欽の発言を引用し、

后妃之制、夭壽治亂存亡之端也、迹三代之季世、覧宗・宣之饗國、察近属之符験、禍敗曷常不由女徳、是以佩玉晏鳴、関

雎歎之、知好色之伐性短年、離制度之生無厭、天下将蒙化、陵夷而成俗也、故詠淑女、幾以配上、忠孝之篤、仁厚之作也、夫君親寿尊、國家治安、誠臣子之至願、所當勉之也、……今九女之制、合於往古、無害於今、不逆於民心、至易行也、行之至有福也、将軍輔政而不蚤定、非天下之所望也、唯将軍信臣子之願、念関雎之思、逮委政之隆、及始初清明、爲漢家建無窮之基、誠難以忽、不可以遴、

とある。前漢末、成帝は好色で放恣な生活を送り皇后以下後宮の女官にも事件が多く、最後まで嗣子が生まれなかったが、杜欽はこの皇帝の女性問題を国家混乱の原因と考えた。そして、后妃制度の重要性を痛感し貞淑な女性を皇帝に娶せるべきであることを王鳳に進言したが、これがこの杜欽伝に引用されている。この中で杜欽は、関雎篇の作者は皇后が好色のため朝寝をしているのをそしって関雎篇を作ったとしており、作者は関雎篇で淑女を詠ずることを通して貞淑な淑女こそが后妃となるべきことをこいねがったとしている。杜欽傳は、第三者が貞淑な女性を后妃にしようと探し求めると解釈した点で原義的解釈や五行篇・『史記』とは異なることになる。また『毛傳』とも第一章の解釈はほぼ同じだが、第二章以下の『窈窕淑女、寤寐求之、』「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾転反側、」「窈窕淑女、琴瑟友之、」「窈窕淑女、鐘鼓楽之、」について『毛傳』が淑女が荇菜を求める意としていたのを、杜欽傳では将軍や信臣などしかるべき人物が皇帝にめあわせるべき貞淑な女性を探し求めるとしている点が異なる。杜欽の関雎篇解釈は、関雎篇を理解しようとしているのではなく、関雎篇によって自己の主張を正統化しようという漢代特有の政治的解釈である。

また『列女傳』[16]魏曲沃負伝に、

男女之別國之大節……周之康王夫人晏出朝、関雎起興、思得淑女、以配君子、夫雎鳩之鳥、猶未嘗見乗居而匹處也、夫男女之盛、合之以禮、則父子生焉、君臣成焉、故爲万物始、君臣父子夫婦三者、天下之大綱紀也、

とある。これは、『漢書』杜欽傳とほぼ同じ内容であるが、杜欽傳と異なり冒頭の興詞「関関雎鳩、在河之洲、」について雎鳩は夫婦ともどもけじめがありなれなれしくないことを隠喩していると説明する。『列女傳』魏曲沃負傳は、興詞の説明をしていることを除くと『漢書』杜欽傳と非常に近い関係にあり、第三者が貞淑な女性を后妃にしようと探し求めると解釈しており、原義的解釈や五行篇・『史記』とは異なる。また『毛傳』とも第一章の解釈はほぼ同じだが、第二章以下の「窈窕淑女、寤寐求之、」「求之不得、寤寐思服、悠哉悠哉、輾転反側、」「窈窕淑女、琴瑟友之、」「窈窕淑女、鐘鼓楽之、」について『毛傳』が淑女が荇菜を求める意としていたのが、魏曲沃負伝では将軍や信臣などしかるべき人物が皇帝にめあわせるべき貞淑な女性を探し求めるとしている点が異なる。

また、関雎篇の『毛序』[17]は、

関雎后妃之徳也、風之始也、所以風天下而正夫婦也、故用之鄉人焉、用之邦国焉、……然則関雎麟趾之化、王者之風、故繫之周公、南言化自北而南也、鵲巣・騶虞之徳、諸侯之風也、先王之所以教、故繫之召公、周南召南正始之道、王化之基、是以関雎楽得淑女、以配君子、憂在進賢、不淫其色、哀窈窕、思賢才、而無傷善之心焉、是関雎之義也、

と、冒頭に関雎篇は后妃の徳について述べると規定する。そして、後半で后妃になるべき淑女を君子（具体的には皇帝か）にめあわせる第三者が存在することをにおわせ、この第三者の考えとして后妃になるべき淑女は貞淑で奥ゆかしく賢明であることがのぞまれるとし、この后妃の理想像を述べることこそが関雎篇の本義であると述べる。これによると、関雎篇の作者は皇帝の結婚相手をきめる第三者であり、関雎篇の制作意図は貞淑で奥ゆかしく賢明であることが后妃の資質であることを述べる点にあることになる。この『毛序』の関雎篇理解は、『漢書』杜欽傳『列女傳』魏曲沃負伝とは近い関係にあり、原義的解釈や五行篇・『史記』とは全く異なり、『毛傳』とは一部を除きほぼ異なると考えてよいと思われる。

最後に王充の『論衡』[18]謝短篇に、

問詩家曰、詩作何帝王時也、彼将曰、周衰而詩作、蓋康王時也、康王徳缺於房、大臣刺晏、故詩作、

とある。ここでは周の康王の時代の大臣が、康王が女性との関係にふけり朝廷にくるのが遅いことをそしって関雎篇を作ったとしている。『論衡』謝短篇の関雎篇理解は関雎篇の作者や制作時代がはっきりと述べられる点を除けば、『漢書』杜欽傳『毛序』『列女傳』魏曲沃負傳等とかなり近いものであり、原義的解釈や五行篇・『史記』と異なっている。

以上、漢代の諸文献の関雎篇解釈を見てきた。その結果、漢代の諸文献の関雎篇解釈は、「求」める当事者が誰かまた「求」める対象が何かに注目して分類すると、①女性が男性を思い慕うとする原義的解釈・五行篇・『史記』のグループと、②淑女が荇菜を求めるとする『毛傳』と、③第三者が后妃となるべき貞淑な女性を求めるとする『漢書』杜欽傳『毛序』『列女傳』魏曲沃負傳『論衡』等のグループに分けることができる。

四、結論

以上みてきたように、関雎篇は第二句の「窈窕淑女、寤寐求之、」の「求」める当事者が誰かまた「求」める対象が何かという点を基準に分類すると、①淑女が異性を思い慕うとする原義的解釈・五行篇・『史記』のグループと、②淑女が荇菜を求めるとする『毛傳』と、③第三者が皇帝の后妃となるべき貞淑な女性を捜し求めるとする『漢書』杜欽伝『毛序』『列女傳』魏曲沃負伝『論衡』等のグループに分けることができる。しかし①のグループも、詩意のレベルでは男性を思い慕う淑女の純情を詠じたとする原義的解釈、皇后が性交渉の相手として皇帝を思い国家の政治が混乱してをこまる点を詩人がそしったとする『史記』等さまざまである。①のグループに属する秦・漢期の諸文献は、その作者に関して、あるいは制作年代に関して、さらにはその内容に関しても様々に解釈しており、その解釈の多様性にはおどろくべきものがある。しかし、「参差荇菜、左右流之、」「参差荇菜、左右采之、」「参差荇菜、左右芼之、」等の興詞の原義的解釈「女性が君子（男性）の来訪を歓待する」の基本的部分（「求」める当事者が誰かまた「求」める対象が何かという点）はふまえており、まだ『詩経』を本文にそって解釈しようとする態度を残しているともいえる。次に、②に属する『毛傳』だが、「窈窕淑女、君子好逑、」に対して、淑女が関雎の徳を身つければ、彼女は幽閒貞専なすばらしい女性であって、必ず君子の好き連れ合いとしてりっぱな后妃になるであろうと注しており、漢代の特徴である政治的倫理的な潤色が認められる。もちろん、①のグループも政治的倫理的な立場から詩を

引用してはいるが、断章取義的に引用しているのであり、自己の主張を正当化することを主眼としつつも『詩経』を解釈しようと言うスタンスは維持されており、自己の主張の正当化のために『詩経』を恣意的に解釈することもいとわないと言う状態には至っていない。最後に③のグループであるが、これは前漢末の杜欽の王鳳に対する進言にもあきらかなように好色で放恣な生活を送り皇后以下後宮の女官にも事件が多かった成帝期の実情を背景に産まれてきた解釈であると思われる。これらは、『詩経』を本文にそって解釈しようと言うスタンスは失っており、自己の主張の正当化のために『詩経』を恣意的に解釈することもいとわないと言う立場で、『詩経』が本来持っていた宗教的文化的権威はほとんど形骸化しており、形式的な『詩経』の権威を利用しているにすぎない。筆者は『毛序』に関して、その解釈がいかなる必然性を持って、いかなる人々の手によって作られたかという点について論じたことがある。[19]

以上、関雎篇に関して漢代多様な解釈が存在していること、そしてそれらの関雎篇解釈が、いかなる必然性を持って、いかなる人々の手によるのかという点、についても部分的に述べた。これが、『詩経』全体についてどうであるか、そして漢代『詩経』学の歴史的政治的思想史的意義はどうであるかについては今後の課題としたい。

（岩手大学教育学部）

注

(1)『詩経』は阮元の十三経注疏本による。『詩経』は、正確には毛亨が伝えたとされる『毛詩』のことであるが一般には『詩経』とよびならわされているので、今はそれに従う。以下も同様。

(2)『赤塚忠著作集第五巻　詩経研究』（研文社　昭和六一年三月）五六頁。

(3)赤塚前掲書　五七～五八頁。

(4)赤塚前掲書　六二～六三頁。

(5)赤塚前掲書　六〇～六一頁。

(6)赤塚前掲書　六一頁。

(7)『詩経全釈』（汲古書院一九八四年八月）一四頁。

(8)境前掲書一四頁。

(9)本稿では、以後これを一応原義的解釈とよぶ。

(10)『毛傳』は阮元の十三経注疏本による。以下も同様。

(11)この点については、『四庫提要』経部「毛詩詁訓傳」の項を参照。

(12)赤塚前掲書五一頁。

(13)『馬王堆漢墓帛書『列女傳』』は池田知久『馬王堆漢墓帛書五行篇研究』（汲古書院一九九三年二月）による。五行篇の章分けも同書による。以下も同様。

(14)『史記』は中華書局出版（一九五九年）による。以下も同様。

(15)『漢書』は中華書局出版（一九六二年）による。以下も同様。

(16)『列女傳』は「劉向『列女傳』の研究」（下見隆雄、東海大学出版会、平成元年）による。

(17)『毛序』は阮元の十三経注疏本による。

(18)『論衡』は中華書局出版『論衡校釈』（一九九〇年）による。

(19)拙論「『毛序』成立考―古文學との比較を中心として―」（日本中國學会報　第四十集三二―四六頁）参照。